

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

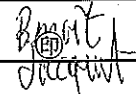
平成 24 年 3 月 30 日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人文科学研究所

職 名・学 年 客員准教授

氏 名 ブノワ・ジャケ (Benoit Jacquet)



助成の種類	平成 23 年度 ・ 研究成果物刊行助成		
研究成果物名	From the things themselves: Architecture and Phenomenology		
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	Ross ANDERSON, Karan AUGUST, Jason CROW, Sylvain DE BLEECKERE, Sylvain DE BLEECKERE, Hubert L. DREYFUS, FUJIMORI Terunobu, Phoebe GIANNISI, Vincent GIRAUD, Karsten HARRIES, Lena HOPSCH, Benoit JACQUET, KAKUNI Takashi, Rachel McCann, Santiago de ORDUÑA, Alberto PÉREZ-GÓMEZ, Fernando QUESADA, Gilad RONNEN, Adam SHARR, TAKEYAMA Kiyoshi Sey, Dermott WALSH, Joanna WLASZYN, ZHUANG Yue		
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配布先
	京都大学学術出版会	2012年3月30日	世界各国の研究者・学術関係者・研究機関および附属図書館
データベース等について	公開方法		公開年月日
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。)		
会計報告	事業に要した経費総額	4,443,180 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学学術出版会による売り上げ	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	組版代	1,953,000	1,000,000
	製版代	593,800	
	刷版代	261,200	
	印刷代	301,200	
用紙代	586,000		
製本代	211,580		
消費税	211,580		
合 計	4,443,180	1,000,000	

伝統的に、建築を考える際には哲学理論が援用されてきた。しかし、ここ十数年の間に、とりわけ現象学という視点から建築という現象を考える試みが数多くなされるようになってきている。京都においても、京都精華大学にて2009年6月26日から3日間、「建築と現象学」をテーマとする国際シンポジウムの第2回目が開催された。当シンポジウムでは、35カ国から140人を超える研究者、建築家、哲学者が、建築と現象学の相関関係について研究発表をするため、フランス国立極東学院と複数のアメリカの大学および京都精華大学によって招致された。建築に関わる者と哲学研究者が、建築を考える新たな可能性としての現象学についてともに論じたこの試みは、世界的にも画期的なものであり、そこでは意義ある議論が活発に行われた。わたしたちはそのなかから、とくに建築と現象学という両者の密接な関係を学際的に論じた22本の論文を選び、それを一冊に編むことで、この新たな分野の可能性を広く人々に伝えたいと考えた。

本書の題名 *From the Things Themselves* (事象そのものから) はエドムント・フッサールが「事象そのものへ」という言葉で論じた現象学の定義を解釈したものである。フッサールの定義を裏返したこの命題は、読者に現象学を、建築を理解する可能性の一つとして把握してもらうことを意図したものである。

本書は、現象学的思考を通じて建築を問うことを第一の目的としている。フッサールが20世紀初頭に創設した現象学は、今日、哲学のなかでも最も豊かな成果を生んだ思想の系譜の一つである。その系譜には、ハイデッガー、サルトル、メルロ＝ポンティ、デリダ、リクールなど、多種多様な哲学者が連なっている。現象学は様々な現象を、その特有の現れ方を司る法則を引き出しながら、その深い意味や特異性を明らかにすることを目指したものである。したがって、このような哲学的な思考方法は、建築的な営為がたびたび試みてきたことを理解するのにきわめて有用なものとして機能する。「生きられた」空間—そこに住まう者の感覚や知性にとって実質的なものとして捉えられるという意味での—について見た場合、現象学は、建築が志向するところを明確にし、より深く掘り下げていくばかりか、建築がなした最も模範的な成果について理解する一助にもなるだろう。

以上を踏まえて本書では、哲学と建築における双方のアプローチを組み合わせ、五つの観点から、すなわち(1) 雰囲気、(2) 物質、(3) 身体、(4) 文化、(5) 展望、の五つから議論を展開する。

まず第一部「雰囲気」では、建築の空間を、感覚や感情の飛び交う空間として考察する。つまり、建築のなかにいる人間にその空間が与える印象や意味に着目する。建築が身体にもたらす経験とは、空間の知覚や一連の機能などに還元し尽くせるものではなく、「世界内存在」としてのわたしたちの全体に関わる。この根本的な論点を踏まえることで、建築が扱う対象である「物質」について考察することが可能となる(第二部)。本書では、この「物質」は技術的な意味においてではなく、知覚され、感じられ、生きられるといった建築的な現象との関係において把握される。そこからさらに物質を超えて吟味すべき対象となるのが、まさに第三部で扱われる「身体」である。それは感じ、思考し、実感する身体のことであり、つねに特異なかたちをとりながら、建築が最も強力な影響力を発揮する対象としての身体である。以上の三つの局面は、場や歴史と密接に関連しており、つねに多様な「文化」としても捉えられる(第四部)。事実、「文化」は、現実の住居に固有の様式や、人間の体験がおりなす特有の形態と切り離すことが不可能である。そして最後に本書は、新しい「展望」へと向かい、現象学の新しい視座を開け広げることを目指す(第五部)。

これらの五つの観点を通して、そしてギリシャ神殿から丹下健三の作品にいたるまでの建築がなした多様な成果を例にすることで、建築を、根源的要素—空間、体積、時間、物質、身体など—によって可能になる人間実践として理解できるようになるだろう。すなわち建築を、現象学的な視座にたつて、その「意味」とともに、その「経験」とともに理解できるようになるのである。本書は、哲学者に具体的なケースに基づいた詳細な分析を提供することで、彼らが自身の概念の実践的な価値をはかることを可能にする。また建築家にとって本書は、彼らの日常的な作業を基礎づけているものや自身の実践を再考するのに必要不可欠な道具について吟味する契機をもたらすだろう。